
魔砲少女リリカルなのは Gear of Night

天宮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔砲少女リリカルなのは Gear of Night

【Nコード】

N7077X

【作者名】

天宮

【あらすじ】

八神はやての隣人で幼なじみ紅竜^{くわじゅうりゅう}刀夜^やの物語。全く普通ではないこの少年がいかにか《運命》に立ち向かっていくのか？

魔法少女リリカルなのはとFateのクロスオーバーです。オリ主、転生者、最強もの、原作ブレイク、キャラ崩壊、ご都合主義、独自設定、ガールズラブ、テンプレ、ハーレムなどの要素を含みます。また、他作品の影響を多分に受けていますので、苦手な方、気に入

らない方はご遠慮くださいませ。

この作品は自分の処女作となりますので見苦しい点多々ござい
ますでしょうが生暖かく見守ってくださいることをお願いいたします。

あと、関西弁が間違っている可能性が高いので先に謝罪いたします

プロローグ - 大切な夢

夢を見た

はかない夢を

大切な人、たった一人の家族を失い、大切な人に気付いた時の夢。

母が死んだ。強くて凜として優しくかった唯一の肉親が……

電話を捨てて、玄関から飛び出した……

公園には人がない。後で聞いた話だと、そのころ外人の渋いオッサンの不審者が出没していたらしい。

ああ、僕は一人になったんだ。その景色を見て、俺はそう思った。そう思ってしまうと、涙があふれ、泣き出してしまった。

「刀夜くん、どないしたん？泣き出してしもうて。」

優しい声が聞こえてきた。振り向くと車いすの少女、八神はやてがすぐ近くにいた。

「母さんが死んだんだ、僕ももうひとりぼっちなんだ。」

皮肉にも、彼女の両親も先月なくなっていた。それをわかっていても僕は言っていた、言ってしまった。

はやては泣きそうになりながら

「刀夜君もひとりやあらへん。うちがいるやないか。刀夜君はうちの居場所でもあるんやろ？」

そういつて手を広げ微笑みかけた。

ああ、俺はひとりじゃないんだ。

そう思いながら、はやての胸に飛び込み、母との別離の悲しみの涙を流した。

五歳の時の大切な記憶。その一週間後が誕生日であった。

その時から、俺ははやてとともに生きていくことを決意した。

オリキャラ設定(前書き)

ネタバレなどを含むためお気をつけください。

オリキャラ設定

紅竜 刀夜 くりゅうとつや

C V 杉田智和

魔力ランク B

無印時 1 2 4

顔は二枚目半。体格は頼りがいがあるががちりはしていない、黒髪を荒く切っている。

八神家の隣に住んでいる。母は六歳の時に聖杯戦争に巻き込まれて戦死。普通の公立校に通っている。

変態という名の紳士。やることはちゃっかりやる。即断即決の怠け者。自分の正義に従う。はやてを深く愛している（恋愛ではなく親愛）。銀さんにかなり近い。

攻防ともに高い格闘性能を持つが、射撃や砲撃は苦手。砲撃は魔力を集めた剣をたたき込むという無茶技で代用し、射撃はアクセルシューターのみ。剣技に関しては高い才能を誇り、魔法なしならシグナムより強い。

スキル

解析魔術 A

道具や物体、魔術を解析する技能。

魔術 C

基本的な魔術（解析、再生、ルーン）などができる。

魔力放出

魔力を噴射して出力の足しにする技法。魔力量により威力が変わる

使用デバイス

デイルロス

デイルズオブディステニーのソーディアンの外見と能力。

アリシアの父親が前の持ち主。

オリキャラ設定（後書き）

話が進むにつれていろいろ追加させていただきます

第一話 無印開始（前書き）

ジエムシードーつ目封印までです。
キャラクター崩壊開始です。

ヒロインははやての予定です。

第一話 無印開始

- 懐かしい夢を見たな…

朝の日差しの中目を覚ます。時刻は6時過ぎ。

もうはやては起きてるかな？そう思い、ベットから起き上がり、リビングへ向かう。因みに、俺は八神家で生活している。二人とも親もいないし、一人暮らしもなんだから一緒に暮らしている。自宅は地下の工房ぐらいいしか使ってないし。

朝食を作っているはやてに声をかける。

「はやて、おはよう。」

「おはようさん。」

豆狸が挨拶を返す。

「豆狸言うな。」

「おい、なぜ平然と心を読む？」

「気にしたらあかん。というよりなあ、刀夜の考えてることやったらあらかたわかんぞ。」 はにかむようにはやては笑った。

「お前は俺のオカンか!？」

俺は顔を赤くしてはやての言葉に返す。はい、ツンデレとか言わない。まだ8歳ですから。

そして、二人で笑い出す。そんな朝の日常。

はやての作った朝食ができ二人で食卓をかこむ。因みに俺は料理は出来ない。食材の目利きは多少できるけど。

「そっついえばなあ。昨日変な夢みたんよ。なんか水橋ボイスで助けてって。」 「水橋ボイスって…」

はやてと俺はオタだ。まあ、細かいことは気にしないで。

「昨日か、なんか俺もそんな念話聞いたけど。」

「念話かあ。魔術関係者やるうか？」

「いや、魔導関係者だろ。不特定多数に対して助けを求めるなんて、魔術師はまずしないし。」

会話を交わす。因みに俺は魔導師でもあり魔術師でもある。まあ、どっちも半人前だがな。はやての治療に役立てばいいとおもい、魔術関係者に会わせたりしてるから、魔術も魔導もはやては知っている。

「魔術師だったら、畏の可能性が高いからな。ここは静観が正解だ。一応、オッサンにも報告しといたし。」

俺ははやてに告げた。ちなみにオッサンは俺の身元引受人かつ上司である。本名は確か月見総司だったか？二枚目のチャライやつだ。

「まあ、この件に関しては静観と言ったところか。」

結論づけて、食事を続ける。

「しかし、はやてもまた料理の腕あげたな。うまいよ。」

煮物もしっかり味がしみてるし、味噌汁のだしの風味も生きてる。

「ありがとう。」

「俺の方こそ、いつもおいしい飯ありがとう。」
お互いに感謝のことばを交わす。

そして他愛もない会話を交わした。

「ごちそうさま。んじゃ、学校行ってくる。今日は恭也さんとこ行ってから帰ってくるから、6時過ぎになると思う。」

「了解や。晩ご飯何か食べたいものある？」

「ふうむ……カツ丼」

「いいで」

「んじゃ、行ってくる。知らないやつや、知ってるオッサンについて行くなよ。」

そういい残して、俺は出発した。

「美由紀は少し離れてくれないか。」

恭也さんが美由紀さんに告げた。これから仕上げというところ

だ。

「シャルティエ」「ディムロス」「セットアップ」

俺と恭也さんが互いにアームドデバイスを構えた。俺がディムロス、恭也さんがシャルティエとタガーである。

恭也さんが距離を詰めてくる。俺は上段からそれを迎え撃つが、いかんせん小3と大1、その年齢差からくる体格差から弾き飛ばされる。そのまま距離をとり、

「轟魔人剣」

ディムロスから魔力波をとばす。約三メートルほどしか間合いはないが少しの牽制にはなる。ディムロスを下段に構え直し反撃に備える。

「そこだ！」

横から突進してくる恭也さんに

「虎牙……」

シャルティエをはじき上げ「破斬！」

上段を返すが

「甘いぞ」

左のタガーの一撃を腹に受け、二メートル程後方に飛ばされ着地、そして追撃。ディムロスをタガーに抑えられ、逆手に持ったシャルティエを喉元に突きつけられる。

「勝負あり！」

美由紀さんの声が響く。

「ふう、」

恭也さんが一息つき、剣を下げた。俺も一息ついてディムロスをしまった。

「やっぱり体重が足りないな。」

体重40キロないしな……つぶやいたら、なんか美由紀さんに睨まれた。なんか変なこと言ったかな？恭也さんは苦笑いしてたし。

「そういうのは女性の前では禁句だよ。」

そういつて、頭を軽くなでてきた。優しいお兄さんな雰囲気だ。

かなりのイケメンだし、噂によるとかなりもてるらしい。

「それはそうと、昨日おかしな念話がきたんだが」

「あの『助けてください』か？とりあえず静観することにしたが」

恭也さんも静観を選ぶか……まあ、忍さんの件で魔術と魔法を知ってるからな、理由は同じどころだろう。

「それにしても、詠唱なしで試合はきつくはないか？」 恭也さ

んは訪ねてきたが

『……ファイアーボールぐらいしか使えんのでな。刀夜は剣技に特化しているからな。ショートカットでシャドーエッジやネガティブゲートを使える恭也には勝てんよ。』

俺のアームデバイスである。ソーディアン・ディムロスが答えた。

ソーディアンというのはデバイスのシリーズ名だ。通常のアームデバイスとちがいが人格が投影されてをり、使用者の先天資質に関わらず特殊な術式（詠唱を伴い魔力波等ではなく現象として発動する）を行使できる点が挙げられるらしい。らしいというのは特殊なものしか相手したことがないからだ。

そうなんだよなあ、恭也さん術式展開五倍速で魔力量が五十倍って張り合える気がしない。後数年すれば張り合えなくはないとは思うが、魔力が足りない。今は勝てないな。

『とはいえあそこまでの剣撃は評価できますね。体重、年齢を考慮すれば十二分に及第点といえます。』

「ありがとうシャル。」 今はまだ弱いことはわかっている。だから頑張れば強くなっていける。そう考えて練習を終えた。

『助けてください。』

念話が聞こえてきた。まあ、無視してギャルゲを続けよう。

『ブルアアアブルアアア』

電話か……携帯から若本の雄叫びが聞こえる。ディスプレイを

確認する。

「恭也さん？」

不思議に思いながらも電話をとる。

「ああ、もしもし？」

『刀夜か？少し頼みがあるんだが……なのはが念話の家から飛び出した。念話のすぐ後だから、多分それに関係あるんだろう。』

「わかりました。現在位置は？」

俺はギャルゲを停止して、席を立った。

「何だあ、あの魔力は？」

恭也さんと合流しようとして道を進むとかなりの魔力の奔流を感じ取る。恭也さん並の魔力はあるな？なのはか？

現場に着くと、改造制服のようなものを着たなのはが、魔法少女が持つには少しメカっぽい杖を持って、影を実体化して作られた十字架に張り付けられた化け物を封印していた。

これが後にPT事件と呼ばれ新たな伝説の始まりになるとは考えなかったが。何かが変わる、そんな気がした。

ってか改造制服風ってwww

第一話 無印開始（後書き）

まずははやてと恭也がキャラクター崩壊しました。

主人公は転生者でも最強でもありませんwwwまだ……

恭也の魔力量はAA。刀夜はCです。

更新は一日おきの午前三時の予定です。

次は29日にノシ

第二話 戦略会議（前書き）

少し短いかもしれませんがどうぞ。
少しキャラ崩壊してるかも。

第二話 戦略会議

「さてと、どういうことか説明してもらおうか。」

土郎さんは食卓の普段なのはの席の前の小動物に問いかけた。ちなみに俺は恭也さんと美由紀さんの席の間に立っている。

「はい……」

ユーノは説明した。

「……要約すれば、次元干渉を引き起こしうる願望器ロストロギア・ジエムシード、それも願いを歪んだ形でかなえるもの。そのかけら21個が事故により海鳴市に落ちてきた。それを発掘し、運搬してきた君が公的機関に頼らずに独自回収しようとしたけど、失敗。その後なのはに拾われ、今に至るといふことかい？」

土郎はどこか呆れながらもユーノに問いかけた。

「はい。」

「てめえ、馬鹿か！？地球の公的機関に頼らなかつたことと、責任を取ろうとした点は誉めてやるけど、次元管理局に応援を頼むとか傭兵を雇うとか自分以上の力を持つものに頼ることは考えなかつたのか？」

地球の公的機関としてはこの類のことは、聖堂教会か、魔術教会、さらにはアトラス院と言うところか。

聖堂教会の場合は次元世界、他世界からの干渉に関してはかなり厳しい。一応そういう類のことに対応する手段はあるだろうが、多分破壊する方向で話が進むだろう。

魔術協会の場合は、回収するだろうが、人材や用具デバイスを奪われた上にジエムシードを持って行くだろうな。情報隠匿のため口封じされそうだし。

アトラス院ならデバイスに関する技術提供で協力するだろうが、日本における影響力が足りないから依頼できないだろう。

「うちの一族は発掘調査を主にした種族で傭兵を雇うような余力は

ありません。実力的に僕が一番ましつてくらいです。管理局には通報はしましたが、正式なロストログア指定を受けていないジエムシードの捜査に回せる人員はいないと一蹴されました。」

ユーノは打ちひしがれていた。なんかorz状態だし。さすがに話せるだけあり、芸達者なようだ。だができることはしつかりやったみたいだ。

「さすがにかわいそうだよ。そんな強く言わない方がいいと思うよ。」

「そうなの」

美由紀さんとなのはがユーノをかばう。ほかのみんなも同じ意見のようだ。

「わりい。言い過ぎた。」

「大丈夫。気にしてないから。」

のほほんと返事が返ってきた。何というか器が大きいな。

「さてと、事情はあらかたわかったから、これからのことを話し合おう。」

土郎さんが微笑みを下げて真剣な表情になった。

「なら、俺はTTS（月村総合警備保障）のサイドとして意見させてもらうぞ。」

「どうしてなんも関係がないみんなが手伝っていただけなのですか？」

ユーノが驚いて聞き返してきた。

「ごうやって事情をなしてもらった以上、何らかの対応をしないといけないからね。」歪んだ願望器なんてものを放置していたら危険だ。なにが起こるかわかったものではないな。」 恭也さんと共に対応の必要性をいった。

「ユーノ君も困ってるんでしょ？だったら、私も助けたい。私にできることがあるなら。」

なのも同意した。

「すみません……」

「ユーノ君ここはすみませんじゃなくて、ありがとうだよ。」

「なのはは軽くむくれながら告げた。」

「そうだね。ありがとうございます。」

「感謝するにはまだ早いぞ。これから身の振り方が決まるんだからね」

「士郎さんは告げた。」

「ジエムシードは基本的に封印でいいのかい？」

「はい。封印作業はレイジングハートを使えば可能です。」

「デイルロス、シャルは封印作業出来るか？」

「俺は自身のデバイスに確認をとった。」

『すみません。戦闘、攻撃に特化して作られたので』

『ハロルドかクレメンテならできたのであろうが。』

「そうか、ならなのはに頼むしかないのか。」

「なのは、お願いできるかい？」

「うんなのは頑張る。」

「よし、よく言った。」

「士郎さんがなのはの頭をなでる。やっぱり親子っていいな。」

「なら、俺はなのはの護衛ってことで受注っていうところかな？報酬はレイジングハートのデータでつりがくると思う。」

「そうか、なら忍に話しておこう。それでいいか？ユーノ？」

「……その前に質問していいですか？」

「ユーノが真剣な眼差しでこちらを見つめていた。」

「なんだい？ユーノ君」

「微笑みながら士郎さんは告げた。」

「あなた達は何者ですか？この世界は魔法といった文明がないはずですよ。過去の歴史や物語といった作品内のもの、現実にはないものとされています。なのにお三方はさも当然のように魔法に関する話をされていますね。」

「さすがにハイペースで話を続けていたが、聞かれるか……タイ

ミング的にも丁度いいな。なかなか空気を読める。

「確かにこの世界には魔法に類する技術はある。ただし、その神秘は秘匿され知ったものの口は封じられる。魔術と呼ばれるもので、それを研究し、行使するものが魔術師。魔術師は基本的に表にはでない。また、知られていないことで、神秘の純度は上がる。だから、教えることは親しい人だけ。知られたら隠匿のため命を奪うという例も少なくはない。」

恭也さんが告げて、

「んで、俺はそういう神秘が関わる問題が起きたとき武力介入し、解決する傭兵のような者だ。土郎さんは元だがな。」

苦笑しながら告げる。

「えっと……刀夜くんって私と同じ年だよな？」

「ああ、うちは万年人材不足でね。六歳から働かせられてるよ。」

まあ、そのおかげで生活費には困らないし、海鳴市にいられるんだがな。

なのはとユーノは驚愕の表情を浮かべていた。

「俺のことはおいといて、ほかに質問は？」

「二人がお持ちのアームドデバイスは何ですか？ベルカのものともいろいろ違うようですが……」

「ああ、ソーディアンか。これに関しては社長から渡されたロストロギアに分類される特殊なデバイスとしか答えられないな。地球以外の世界から持ってきたらしいけど……」

頭をかきながら答えた。実際うちの社長は色々超越している。

転移で異世界にいけるらしいが、なんかこの前アルハザードに行ってきたとか言ってたしなあ。この二本だってある世界の英雄から譲り受けた古代の剣らしいし。

「ああ、あとはこいつら自体がリンカーンコア的なものを持って、魔力が全然無い俺でも扱えるし、変換資質はこいつら自体のものをつかう。」

「リンカーンコアってなに？」

「なのは、リンカーンコアっていうのは、魔法を使う魔力を生み出す器官のようなものなんだ。まだ、そのような技術は確立してないらしいけど、ロストログアだったらあり得るね。」

なのはにユーノが解説した。

「ちなみに俺はなのはの五十分の1ぐらいの魔力しかないから。」
「少ないね。」

「そうだけど、なのはの魔力量が多いだけだから」

一般武装局員より少ないけどね俺の魔力。

「質問は終わりかな？」

二人をみた。うん、

「無いようだったら、レイジングハートのデータをとらせてもらっていいかな？なあに、データを取るといっても明日の午前中、なのはが学校に行ってる間にとっちゃまうるさ。」

「……それに同席してもいいですか？」

「勿論。むしろ来てもらわないと困る。」

「ならその方向でお願いします。」

一通りの結論がでたから解散だな。

「んじゃ、ユーノこっちで預かって行きますね。」

「ええ、ユーノ君連れてっちゃおうの！」

美由紀さんが反論してきた。

「理由は？」

「飼いたい。」

いや、その気持ち解らなくはないけどねえ。なんかユーノも苦笑いしてるし。

「どうする？ユーノ」

まあ、本人の意思を尊重しよう。どちらも受け入れる分に問題なさそうだからな。

「それじゃあ、なのはのところ」「了解。それじゃあまた明日。」

ユーノを机において俺は帰宅した。

第二話 戦略会議（後書き）

刀夜としてはユーノをペットの的な扱いにしてはやての無聊をどうにかできないかなと考えてました。

ちなみに、ソーディアンはベルカ式をベースに作られたデバイスです。アームドデバイスです。バリアジャケットなんて便利なものは使えません。

このような駄文を読んでいただいたことに感謝をノシ

第三話 戦闘なんておまけさ(前書き)

一応原作第四話までの話。

主人公の身体能力は衛宮士郎(身体強化なし)と同程度です。

第三話 戦闘なんておまけさ

「魔王炎撃波」

なのはに迫り来る、犬型の思念体を炎をまとった斬撃で打ち返し、追撃を仕掛けるため距離を詰める。

「紅蓮剣」

そしてディムロスを投げつけ、地面に貼り付けにする。

「なのは！」

俺はなのはに声をかける。

「うん！」

『Seeling Mord』

なのはが速攻でジェムシードを封印した。

「楽勝だったね。」

なのはがうれしそうに言った。いや、なのはは楽だったろうけど、俺はそこそこ頑張ったぞ。一番魔力使ったのはディムロスだし、てか魔王炎撃波はやりすぎだったかもしれないな。

「んまあ今回はこの程度だったってことだが、次回はこう上手いくとは限らない。所詮獣の願望だしな。」

人が関わっていればもっと被害は大きくなっていただろうしな。一休みして帰ることにした。

「サッカーやらないか？」

「だが断る。そんなことよりギャルゲをしたい。」

なのはを家に送り届けた際、土郎さんにサッカーに誘われた。

何でも明日の試合があるけど、フォワードの奴が必殺シュートの練習中、股関節をはずしてでられなくなり、人が足りないらしい。股

関節がはずれるシュートって……翠屋FCはフォワードができる奴が三人しかいなく、ディフェンダーだらけらしい。

「小学生からギャルゲって。たまにははやてちゃんにかっこいいとこ見せたらどうだい？男の子なら好きな女の子にかっこいいとこ見せないと。」

「おい、監督。監督自らそんな発言をするな。それに、はやてはそんなじゃないよ。……まあ、かっこいいとこ見せとかないといけないかな。ちいと最近立場が弱いし。」

最近はやてに構ってあげられないからなあ。

「解りましたよ。まあ、俺がでたら三点ぐらいとれますよ。」

前に一回助っ人をやったときは、8対0で勝ったし。

「それじゃあよろしく頼むよ。」

「はい。」

「プレイボール！」

俺は最初ハーフラインより後ろの位置に立った。相手のミッドフィルダーがドリブルで突破しようとしてくるのをうすく近づきさりげなくボールを奪い去った。

「強行突破！」

そのまま中央を力業のドリブルで突破する。1人、2人、3人、4人！クォーターラインまで上がり、あとは！！

「デッドスパイク！」

気合いを入れてロングシュート。魔力も込めている上左端をねらい大きくカーブをかけている。……もう一般的な小学生がとれるシュートじゃないな。打った俺が言うせりふじゃないけど。

笛が響く。

「当然だ」

ニヒルっぽく微笑んでみる。

「刀夜がやっても似合わんでえ。」

はやての痛烈なツッコミにまわりから苦笑が聞こえた。

「俺頑張ったよね？この扱いはどくくない？」

つつこみを入れながら、少し悲しくなってきた。

「その方が刀夜らしいで。」

はやてが微笑んでいた。やっぱり笑顔で居てくれるとうれしいな。

「うっしやあ、次いくぞ！」

- Side はやて

昨日刀夜が『明日サッカーの試合でないといけなくなった。応援に来てくれないか。』やなんていきなり言い出したさかい、来てみたんやけど、刀夜がんばつとるなあ。いきなりシュート決めてまるやなんて。

「ふええ、刀夜くんすごいね。」

となりにいるツインテの少女 - なのはが目を丸くしていた。まあ、うちも幼女何やけどな。

「せやる、うちの刀夜は色々並や無いで！」

「うちの？」

なんかはてなマークが浮かんでおるな。

「ああ、うち、刀夜と同居してるんよ。」

「ふええ」

なんかめちやくちや驚いとるし。

『ってことは魔術関係者！？』

普通に念話で話しかけてきとるし。まあ、恭也さんの妹やから魔法の才能もあるんやろう。やけど、こうやってきくんわあまり感心できへんわ。自分が魔法が使えるってことを相手にばらしてしまっさかいな。あと、うちは魔法が使える。

「なにあいつ。あんなシュートまとにも食らったら怪我するんじゃないの？」

金髪の幼女が不安がつてる。何やろう、幼女幼女言つとるとな
んか汚れていく気分がするんやけど。

確かに全力でやりすぎやる。少しは加減しないと。あーあ、マ
ク三人もついとるやないか。

「怪我しないように気付けてえな。」

声をあげた。注意しとかんと怪我させてしまいそうやし。

「刀夜君凄いな。」

すずかちゃんが話しかけてきた。やけども、刀夜がなのはちや
んとすずかちゃんどっちとも面識があるやなんて驚きや。世間も狭
いもんやなあ。まあ、月村ゆうんやさかいTTSとなんか関係ある
んやろうと思っけど、聞くのも野暮やから聞かへんけど。

「そうねえ。身体能力的にはすずかを越えてるんじゃないの？」

「いや、それもそうなんだけどテクニク的にも。何気なくボール
を奪ったり、ちらほら技で抜いてるから。」

二本目のシュートがネットを揺らす。刀夜がマークを抜けて叩
き込んだみたいだ。

「……なんであいつFC入ってないんだろう？普通にエースになれ
るでしょう。」

「そやなあ、たまにふらつといなくなるんやけどクラブに入るぐら
いのゆとりはあるやろうけど。」

金銭的にも余裕はあるはずやし、うちのせいやったらややなあ。
後で聞いてみよ。

「そういえば、はやてってあいつと一緒に暮らしてんでしょ？」

「うん。そやけど」

「あいつって彼女とかいるの」

アリサが妙な質問をしてきた。

「そやなあ……」

本当のことを言っているのかどうか少し悩んだんやけど。

「おらんはずやで。ラブぶすにはまっとするみたいやけど。」

言い表せない沈黙があたりを包んだ。うちはわるくない！悪い

のは刀夜のはずや……たぶん

「……そうなんだ。彼女いないのか。」

アリサはうちの発言をスルーしとった。刀夜に気があるみたいやなあ。

「なんや、刀夜に気あるんかいな？」

「なっ！そんなんじゃないわよ！」

「そんな赤くなって否定するなんて……ナイスツンデレ！」

「ツンデレじゃない。」

なんとというか、おちよくりがいがああるわ。ツンデレおいしいです。アリサちゃんをおちよくりながら、試合は進んでいった。

Sideend

「ゲームセット！」

ホイッスルが響き渡り、試合が終了した。結果は7対0で翠屋FCの勝利である。俺自身の成績としては3ゴール四アシストという全てのゴールに関わっているという結果に。

「刀夜お疲れさん。……やけどやりすぎやろ。」

「いやいや、小学生のフィジカルで俺の相手とか無理だろ？ サッカ一のワンONワンで恭也さん（超高校生級）から一点はぎ取れるんだぜ……二点とられるけど。」

「なんか聞けば聞くほどチート臭いわね」

金髪幼女があきれながら言ってきた。

「まあ、チートだし。」

俺は苦笑いしながら言った。ただでさえ高い身体能力を、魔力を使ってさらにバンプ。で、技術面に関してはこれまた魔術を使い超高効率のイメージトレーニングをやることで大いに時間を短縮している。自分以外の人間、今回はセリアAの某選手の経験を己に投

影する。しかし、その経験は己の経験ではないから、誤差がでる。あとは実際に体を動かして自己流に改変していただくだけ。まあ、分的には経験値チートになるのかな？

なーんて考えながらどや顔をした。

「……なんというか、三枚目ね。」

アリサ、いきなりその発言はないと思うぞ。なんかなのはとすずかが苦笑してるし、おい、はやて何でどや顔をする？

「なのはいいかい？」

土郎さんがなのはを呼んでいった。多分ジエムシードかな？

なのははその場から離れて行った。物陰でレイジングハートだけ展開してジエムシードを確保していた。

あとから聞いた話によると、ジエムシードを持ってたのはキーパーで彼女へのプレゼントにするつもりだったらしい。事情は話せないけど回収しないといけないから、俺への報酬にしたいということにして確保。代わりに護石を渡したらしい。いや、散財乙。護石つて一万ぐらいするんだよなあ。

「本日の勝利に乾杯！」

土郎さんが乾杯の音頭をとり翠屋でパーティーが始まる。俺は？もちろん！

「レッツパーティー！」

はやてたちとここで叫んでみた。パーティーといえばこれだろ。

「うるさい！」

アリサからの右フックを交わした。

「ツッコミに右フックはひどくないか？」

「そうそう、一応今回のMVP何だし多少ハメ外したっていいんじゃないかな？」

すずかがフォローを入れてくれた。

「まあ、俺は今回助っ人にすぎないからな、このぐらいにするけど。」

「あんまりはしゃいじゃいけないだろ。なので外席ではやてたちと五人で座っている。」

「刀夜もお疲れさん。」

「俺頑張ってみた。誉めろ」

「ほめてもらうのを求めるな。」

「そうだな」

「ユーノ君って可愛いよね。」

「そうだね賢いし。」

「こんなこともできるよ。お手。」

なのはが手を差し出すとユーノがお手をした。

「かわいいなあ。うちもやりたい。」

「いいよ、」

「せやったら……お手、おかわり、反省、チンチン」

ハリセンではたく。てか反省までやるなよ……

「女の子がチンチンとか言うなよ。ユーノも硬直してるじゃないか」

みんなして苦笑していた。

「みんなはこれからどうするん？」

はやてがみんなに尋ねた。

「これからみんなでドライブにいくんだ」

「私はパパとシヨッピング！」

「私は疲れたがらもう一眠りするね。」

「さすが、アリサ、なのはが答えた。なのはの意見がオッサン臭いとかはつつこんだら駄目。ジエムシードの封印とか、魔法と出会ったりといういろいろ気疲れしてるんだろう。」

「俺は予定もないし……はやて、どっか遊びに行くか？」

「軍資金は三万あるし問題ないな、最近はやてと一緒にいる時間が減ったしな。」

「そやな。まずは books かな。」

「んじゃ一度帰らないとな。」

「このままいったらなにも買えないしなWWW

第三話 戦闘なんておまけさ(後書き)

キャラ崩壊しました。はやては重度のオタクです。サラブレットです。

やっどギャグつぼくなれたかな？個人的には微妙

刀夜の魔術に関する記述があります。これ、チート？って感じですが、非転生の小学三年生がまともに戦えるぐらいの経験値を得る方法なんてこれぐらいですが……因みに欠点としては経験を得るには対象の物品に一时间程の魔術行使、さらにはひとどつりやってみての調整、自己ではないから起こるミス等があげられます。結局時間短縮にしかありません。

この時点ではやては三人娘と友達になります。

基本は刀夜視点の形式なのですが、今回はSide を使い視点を変えてみました。

次はついにフェイトが登場！寂しい目をした彼女に刀夜は……後ユ
ーノこのままペットライフでいいのか？

それでは次回をお楽しみにノシ

第四話 運命の出会い（前書き）

フェイトをいじりきれなかった。

すみません。投稿十時間遅れました

第四話 運命の出会い

「……お邪魔します。」「……
いらつしやい。」

俺らはすずかに誘われて月村邸に来ていた。

「今日はいい天気ですから、庭にお茶会の用意をしたのよ。」

忍さんが朗らかな笑みを浮かべて教えてくれた。

「ありがとうございます。……それじゃあこいつも頼みます。」

そう言つてデймロスを渡した。今日来た理由は、表向きはずかのお茶会、俺と恭也さんはデバイスの定期整備である。

「はい。それじゃあ恭也、手伝つてくれるかしら？」

「もちろん」

「ファリンお願い。」

言葉を交わして2人は別室に移動した。

はやてと一緒になのは達の学校の話聞く。

「楽しそうやなあ。」

はやてがしみじみと言った。原因不明の足の麻痺。魔術的な素質に恵まれてるはずなのに、全く魔力のない状態。こいつはその様々な理由から小学校には通っていない。俺とはまた違う圧力がこいつにはかけられている。俺にもう少し力があればなあ……

「はやても学校に行けるようになるよ！」

アリサが励ました。

そうだな今は行けないけど来年度までには……思いを心の中で固めた。

「そうやな。まあ、行けるようになって、聖祥いけるかわからへんけど。」

はやては苦笑いするが、「多分行けるだろ。理事長とは仕事一

緒にしたことあるし、最悪奨学金とかフル活用すれば。」

あの人なら事情を話せばいろいろ融通してくれるだろうし。

「ちよつと待った!」

「なに?」

「どうしてあなたは理事長と一緒に仕事してんのよ。」

アリサ以外からはやつちやつたなあという空気が漂っていた。

「あの……ああ、あれだ国家機密に関わってくるから聞かなかつたことにしてくれ。」

一応違つてはいない。

「それで納得できると思つてるの?」

「いや、全く俺ならむしろ気になるけど、命は惜しいから深くは突つ込まないだよな。なのは」

「ふえええ?知ったら人生が変わつちゃうこともあるからね。好奇心じゃ近づきたくないかな」

いきなり話を振られて焦つてはいたが、なのは意見を上げた。「そうね。気にはなるけど知らなきゃいけないことではないからね。」

アリサは引き下がった。ああ、良かった。アリサは世界シェアの企業の令嬢だから知られるといういろいろめんどくさい。

「そう言えばあんたつて学校じゃどんな風にしてるの?」

「ああ、俺は普段は……」

ふと、学校での出来事を思い出した。……普通じゃないな。

「そうだな、普段はヅラと晋作と一緒に遊んでいてな、コイツ等がまた濃いメンツでね。」

はいそこ、お前も普通じゃないだろとか言わない!

「なんかヅラは意味不明な発言するし、晋作はたまに破壊衝動全開になるから止めるのに苦労するんだよな。」

「破壊衝動全開の小学生つて。」

しばらく学校での話をした後俺たちはゲームをはじめた。某狩りゲームだ。

「畏落としたぞ」

「それじゃあ全力全快竜撃砲。」

「鬼神化入ります。」

「よっと、ヒット！」

使用武器は俺弓（普段は大剣）。なのははAGガンズ、さすがが双剣、アリサが大剣だ。女性陣が普通に近接特化って。なんかガンナー防具作ってなかったし。

「んじゃ球投げてっと。」

捕獲した。

「終わりっと」

4人でやれば、ギギ10体だって狩り切れるさ。

「やったね」

報酬のアルビノエキスもたっぷり手に入ったな。

「む？」

ジエムシードが起動したようだ。まずはデバイス回収しないと。恭也さんとことつってくる。」

濡れ場なら気まずいな。

「うちもいく。」

濡れ場希望か！？

「私も往くの」

漢字違っよ！何を征するつもりなの？

「私は遠慮しとくわ。」

アリサとすずかはいかないようだ。

「うわ、気まずいな。」

盛ってましたよ。まだひも高いのに。まあ、事後っばいし辛う

じてかな。

「悪い子はいねえか！」

若本風に入ってしまった。「うわ、匂いが……ちょっと盛っちゃいそうや。」

「大丈夫じゃないな。はやて」

「ちよつ、いきなり入ってくるな。」

「そうよ。空気は読まないと。」

2人は慌てていた。

「いやあ、本音はとつりたくなかったんだけど、ジェムシードが起動してみたんだから、ディムロスを回収しにきた。」

「ああ、それならテーブルの上上がったるよ。」

「了解。」

『なのは、結界で隔離したら、なんか女の子の魔導士が攻撃を開始したよ。』

『私達もすぐいくから、隠れて待ってて。』

「ファイヤーボール！」

先手必勝とばかりに、火の玉を飛ばした。

黒い服着た少女は難無くそれをかわす。

「フォトンランサー」

反撃の魔力弾を飛ばしてきた。牽制とばかりに飛ばしてきたのを俺はきりとばそうとして……

「しいびいれえるうう」

感電した。

Sideフェイト

母さんに頼まれてジェムシードの回収にきた。一つ目のジェムシードを封印するため戦闘を開始した。おっきいネコをボコボコに

するのは気が引けたけど、母さんの為、涙をのんで叩きのめしジェムシードを封印した。子猫が元のサイズに戻り、すやすやと寝てる。「ごめんね」

謝ったのは自己満足でしかないけど。

「ファイヤーボール」

声が聞こえて、火炎弾が飛んでくる。不意打ちだったら当たるだろうけど、十分にかわせる。かわしたら反撃！

「フォトンランサー」

魔力弾が相手に迫っていく。えっ、剣のデバイスで切った。でも感電してるし。フォトンランサーをきりとばした少年の後ろには少女がいて、

「お願いレイジングハート！」

バリアジャケットをまとい、杖をこちらに向けてきた。

「同系の魔導士……ジェムシードの探求者か？」

もしそうだったら、戦わなければいけない。だったら。

「バルディッシュ」

『サイスフォーム』

戦うまでだ

S i d e e n d

感電状態から回復すると、金髪の少女が鎌状態のデバイスできりかかってきた。まあ、鎌なら。

余力を持って柄を足で押さえつけた。

「えっ？」

金髪少女は呆けているが、実戦でそれはないだろ。ディムロスを突き出した。

「きゃあ」

少女は二メートルほどぶっ飛び、ダッシュで距離を詰めて左手でキャッチする。

「金髪幼女（露出趣味あり）ゲットだぜ。」

「露出趣味なんてありません。」

金髪幼女は反論してきた。

「んじゃ、」

そのまま体勢をかえ引き倒した。

「事情聴取といきますか。えー、まずお名前は？ペンネームでも構いませんよ。」

だんまりか、

「それじゃあ、痴女幼女か金髪レイヤーかどっちがいいと思うのは？」

戦闘開始かと意気込み突進して来たから空に逃げ出したなのは聞いてみた。

「初対面の人にいきなりその呼び方はひどいと思うけど。後の方がましだと思うの。」

「よし、なら、金髪痴女レイヤーさん。そのコスの作成者は何者ですか？」

「全部のせ！むしろ、一つ目の質問がそれって。」

涙目になりながらツツコミを入れてきた。

「名前も聞いてないし、それにそんな職質くらいそんな格好だから、金髪痴女レイヤーさん。」

「私の名前はフェイトです、フェイト・テストロッサです。」

名前ゲット。

「んじゃ、次の質問。テストロッサはどうして、ジエムシードを集めてるんですか？」

「それは言えない。」

「まあ、急いで事情を話してもらおう必要もないかな。背中にかかなりの傷とか。いろいろあるし、手段を撰ばな……………」

「フェイトを離せー」

犬耳の女性が跳び蹴りしてきた。俺は軽く舌打ちして、フェイトを反対方向に飛ばしながらかわす。

飛んできた女性はフェイトを確保すると飛んでいった。

「逃げられちゃったね。」

「ああ、」

「あつ、思い出した。」

「なんだデイルロス？」

「多分なんだが、あの子は私の前の持ち主の縁者かもしれない。」

「……………マジで!？」

第四話 運命の出会い（後書き）

戦闘が出来ませんでした。あと、格闘戦はかなりスキルが高いのでこんな結果になりました。フェイトファンのみなさまごめんなさい。

あと、恭也は盛らせました。何というか、Vividまで書くこと考えるとそろそろ子づくりを初めてもらおうかと……

考えるとアリシアの父親の設定って明かされてない気がする。

第三話タイトル修正見たら二話になってました。
タグ追加、ちなみにクラスメイトとしては、桂小五郎、高杉晋作、坂本龍馬、月読がいます。クラスメイトは増えるかも

次は間に合わせて見せます。では次は四日にノシ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7077x/>

魔砲少女リリカルなのは Gear of Night

2011年11月2日14時11分発行